

自主グループの活動と連携した 地域を基盤とする看護教育の成果と課題

平野 文子・伊藤 智子・高橋恵美子・別所 史恵
加藤 真紀・山下 一也・阿川 啓子

概 要

生活モデルによる看護教育の充実を図るため、自主グループの活用と連携した地域基盤型教育を看護教育に取り入れた。アンケート調査と課題レポートから学生の学習成果として、「地域の自主グループに対する興味・関心の高まり」、「当事者の理解の深まり」、「コミュニケーション能力の向上」、「学生の自己変革・エンパワメントの向上」を認めた。また、自主グループのエンパワメントも促していた。「生活者」の理解、コミュニケーション能力向上などに地域基盤型教育は効果があると考えられた。課題として、学生の自主グループ活動参加のための時間の確保と調整、学生間の学習内容の共有化を図ることなどが明らかになった。

キーワード：地域基盤型教育, 自主グループ, 生活者, コミュニケーション能力, エンパワメント

I. はじめに

地域を基盤とした教育は、地域社会のニーズやそれらのニーズに対応したヘルスサービスの提供能力を高めるために、地域社会に入って自ら学ぶ教育方法として取り組まれてきている(伊藤, 2010)。島根県立大学短期大学部(以下、本学)では、大学憲章に『地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学』の実現を掲げ、教育理念として『「開かれた大学」として地域社会の発展に貢献する』ことを謳っている。これまでの看護教育は疾患や症状を中心とした「医療モデル」に基づく内容であり、施設を中心とした教育が主流であった。しかし、医療費の定額支払制度や在院日数の短縮化により「入院治療」から「在宅医療」へと医療の流れは移行し、人々を疾患中心ではなく、一人ひとりの価値観や生き方を尊重した「生活者」として理解すること、地域のニーズに対応する新しい人材が求められてきている(國井, 2003; 下村, 2003; 吉川, 2009)。すなわち、QOLを志向する「生活モデル」による教育が必要となっ

てきている(金井, 2001)といえる。

そこで、「生活モデル」による看護教育の充実を図るために地域の自主グループ活動と連携した教育プログラムを試行し、地域に学ぶ方法を取り入れることとした。このような「生活モデル」による地域基盤型の学習方法を取り入れた成果報告は、看護教育においては少ない。ここでは、その教育方法を紹介すると共に、地域基盤型教育による看護学生(以下、学生)への学習成果と課題について述べる。

II. 研究目的

地域で健康課題に取り組む自主グループ活動と連携した、地域基盤型教育を試みた。看護学科3年次生の学習成果と課題を明らかにし、今後の教育プログラム作成のための基礎資料を得ることを目的とする。

<用語の定義>

地域基盤型教育：生活意識や問題意識の高い自主グループなど地域との連携を通じて、多様化する社会のニーズを明確に認識し、それらに



図1 自主グループの活動と連携した看護教育の特徴

表1 JTネットワーク参加の自主グループ一覧

ジャンル	自主グループ名
がんサロン	(1)くつろぎサロン (2)がん情報サロン:ちょっと寄ってみません家 (3)ほっとサロン (4)益田がんケアサロン (5)ほっとサロン浜田 (6)ハートフルサロン松江 *がんサロン:がん患者がお互いの療養体験を語り合い、がん医療の最新情報などを学習する場
介護予防	(7)おおつ健康サークル (8)町内助け合いチーム:秋葉会
特別な支援	(9)島根県東部発達障がい者支援センター:ウィッシュ (10)島根県重症心身障がい児(者)を守る会 (11)島根県自閉症協会 (12)紫陽花倶楽部(軽度発達障がい児者家族の会) (13)チャイルドラインしまね
難病	(14)雲南市パーキンソン患者・家族のつどい (15)全国膠原病友の会島根県支部 (16)みつばの会(パーキンソン病患者家族の会)
認知症	(17)認知症の人と家族の会
自主防災・減災	(18)鷹巣地区自主防災会 (19)松江市法吉公民館 (20)宇波地区自主防災組織
子育て	(21)益田おやこ劇場(子どもの自主性・創造性を育む会) (22)ひだまりの会(不登校などの子を持つ親の集まり) (23)pont-de-ange(ポントアンジェ:発達障がいの子どもの構造化等を支援する会)
吃音	(24)島根セルフヘルプグループ(吃音の会)
自死遺族	(25)しまね分かち合いの会・虹(自死遺族の会)

対応できる能力(生活者としての理解, コミュニケーション能力や問題解決能力)を育成することをねらいとした教育。

Ⅲ. 学習の概要

1. 取り組みの特徴

1) 地域の健康課題に取り組む自主グループ

自主グループは、地域の様々な課題に取り組む人々で組織され、1980年代以降、特定の課題をもつ人々のグループ化や組織化が進められるようになってきた。これは、地縁組織への帰属意識の低下、健康問題の多様化と個別化、当事者の主体化・エンパワメントへの期待など近年のコミュニティの変貌に起因している。

健康課題に取り組む地域の自主グループに着

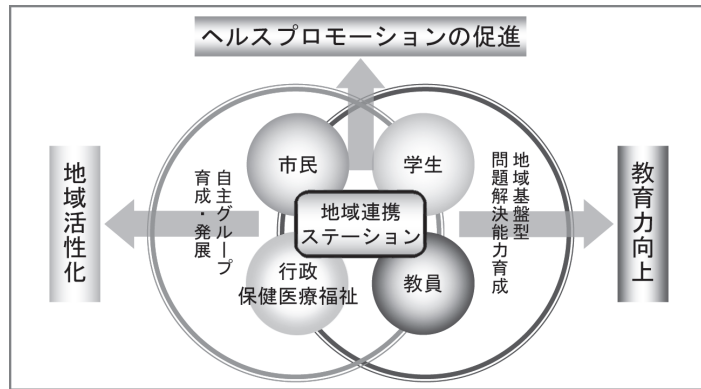


図2 地域連携ステーションと期待される効果



写真 自主グループへの参加学習

目したのは、1) 地域の健康課題や社会背景の理解ができる、2) 多様な自主グループの活動の存在や意義の理解ができる、3) グループ活動の発展のプロセスに対応する健康支援等について学ぶことができ、学生のみならず教員、そして当事者、コミュニティのエンパワメントの向上をもたらす、と考えたからである。そして、自主グループ活動と連携した教育を行うことで、これまでの「医療モデル」による看護教育の限界を越え、「生活モデル」による教育の充実が図れると考えたからでもある(図1)。

島根県では、少子高齢化、人口減少が顕著であり、高齢化率27.6%(平成18年)は全国1位、がん死亡率(人口10万対)も全国2位であり(平成19年)、自殺率も高い。このような地域の健康課題に対して、介護予防に取り組む「健康サー

クル」や「認知症の人と家族の会」、がん患者や家族が情報交換を行う「がんサロン」「自死遺族の会」などの自主グループが県下に多く存在する。そのグループに学生の訪問や活動参加などの協力を依頼した。

同時に、島根県は東西に長く、離島や中山間地域が多いため、自主グループ間にITを活用した情報ネットワークの構築を行った。呼びかけた自主グループは、ライフサイクルを軸に島根の特徴的な健康課題に取り組んでおり、教育への参加協力が得られるグループとした。また、東西に偏りなく位置するグループとなるよう配慮した。その結果25の自主グループとなった(表1)。

2) 地域連携ステーションの設置

地域連携ステーションは、地域基盤型教育の

表2 平成21年度 地域基盤型学習プログラム（参加型）の概要

科 目	医学概論・生命倫理	成人看護特論・看護
教育目標	医療における倫理的課題に関心を持ち、実際の問題点に気づき、考える。	地域でがんと共に生きる患者とその家族によるがんサロン活動に参加し、本人・家族のニーズや支援に関する現状と課題を理解し、がん看護について考察する。
	島根で最も良いがん治療が受けられるシステムをつくる。	1.がん患者と家族を取り巻く現状・ニーズを理解する。 2.がん患者と家族が抱える課題を理解する。 3.がんサロンの設立、条例などの制定に至る患者と家族による活動を理解する。 4.がん看護としての支援のありかたを考える。
協力頂いた 自主G・地域	がんサロン	がんサロン
学習内容・ 方法	<ul style="list-style-type: none"> 「がんと闘う」がん患者自主グループから招致講義を受け、その後、5～10名を1グループとして、がんサロンに見学参加した。 がんサロンは出雲市内1カ所とし、学生へは課題として「島根で最も良いがん治療が受けられるシステムを作る」を与えた。 	<ol style="list-style-type: none"> ガイダンス 患者・家族によるがんサロン活動の実態について文献学習・参加学習を行う。 がんサロンに集う人々を取り巻く生活環境、ニーズや支援に関する主題を取り上げディスカッションする。 がんサロンでの学習の準備と参加 「島根県におけるがん医療の地域格とその背景」を明らかにするためにインタビューを行う。 サロンおよび行政関係者を招いての学習報告・意見交換会を企画・実施する。 ★1年生も参加し、学習の機会とする。 学び冊子作成
学生の学び	<ul style="list-style-type: none"> アットホーム、病気への前向きな気持ち、看護師のあるべき姿などがキーワードであった。地域医療格差、在宅医療、緩和ケア、看護師の役割などがキーワードとして抽出された。 島根で最も良いがん治療が受けられるシステムを作ることは、財源不足などの現状を指摘するものが多かった。 自主グループ(がんサロン)での討論をもとに学習をしていることが伺えた。 	<ul style="list-style-type: none"> 島根の医療の現状・実態を理解する：「医療格差の実態」について、当事者の声と島根の地形や交通機関、医療機関・専門職種などの医療資源と対比しながら、理解できた。 現状・実態から、患者と家族のニーズ・抱えている課題を分析できた。 医療資源が少ない島根だからこそ、がんサロンは重要な社会資源であることを理解した。 看護職としての役割について考察していた。「情報提供」や「患者の持得る能力が発揮できる支援」など。
評 価	<ul style="list-style-type: none"> 医療の場面において看護師は患者の権利を守る立場にある。また人を対象とし、その生命にかかわる立場にある者の倫理面への教育は大切である。実際の自主グループに参加してこの倫理面の教育には特になんかがん患者の自主グループへの参加は非常に意義があったと考えられる。 自主グループへの参加を看護教育の中に取り入れている講義は少ない。今後さらにどのような方法が望ましいのか検討していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 目標1～3は、訪問計画書・訪問記録および学習発表資料に記述があり、島根の医療資源データと声の分析によって深く理解することができた。 目標4は、学習発表として考察した内容で、課題レポートにも意見が述べられ、考えを深めることができた。 科目終了後もがんサロン交流会の後援としてがんサロン活動の支援に参加。それらによって、さらにコミュニケーション能力の育成と島根の医療職としての自覚を高める機会となった。 昨年度の課題の改善：他職種との連携についての学習→行政関係者を発表会に招いた。 →全国がんサロン交流会に参加し、他職種との協働の場を見ることができた。 地域の理解の視点が弱く、意図的に組み込むことが必要である。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> 入学後間もない時期に医療現場を体験する早期臨床体験学習になっている。ただ、病気の理解においては専門用語も多くあり理解するのが難しい。 現行のカリキュラムでは自主グループの活動時間と学生が自由に使える時間が合わず、時間の確保が困難である。時間的にも制約があり、時間不足の課題が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> テーマの決定、訪問計画の立案、インタビューの実施、データ分析まで、限られた期間内で学習展開をする負担感、がんサロンの活動日との時間の調整が難しい。

自主グループの活動と連携した地域を基盤とする看護教育の成果と課題

研究の基礎演習	看護研究の基礎演習 (老年)	小児看護特論
<p>災害と各時期における看護独自の機能と一連の看護活動(災害看護)について理解を深める。また、災害当事者の理解を深める。</p>	<p>地域に暮らす比較的元気な高齢者の生活ニーズについて考える。</p>	<p>重症心身障害をもつ子どもと家族の理解を深め、ニーズや支援の方法について理解を深める。</p>
<p>災害と被災者に対する具体的なイメージができるように、実際に起きた身近な災害(鳥根県で2006年7月におきた豪雨水害)をテーマに学習を進める。特に被害の大きかった朝山地区に実際に出向き、被災者の理解を深め、看護者・地域住民、両方の視点から防災・減災に対する自己の考えを深める。</p>	<p>健康づくり、介護予防のための自主グループの誕生・発展・社会資源の役割、看護職の役割、ネットワークづくりについて考える。</p>	<p>1.重症心身障害児(者)とその家族を生活者(在宅)としての視点で理解する。 2.重症心身障害児とその家族のエンパワメントおよびニーズを理解する。 3.1・2の理解に基づき、看護職としてできることは何かを考える。</p>
<p>朝山地区</p>	<p>おおつ健康サークル・大社町秋葉会</p>	<p>重症心身障害児(者)を守る会</p>
<p>1.講義：ガイダンス、災害看護の概要 2.自己学習 ①2006年7月豪雨災害について調べる ②朝山地区について事前学習をする 3.演習 ①豪雨災害に実際にあった当事者にインタビューを行い、災害と被災者の理解を深める ②現在の防災に対する組織体制についての講義を受ける(朝山コミュニティセンター長) 4.演習 ①「災害を語る会」に参加する ②アンケート調査の実施 5.グループ学習:レポートにまとめる 6.冊子にまとめ発表する</p>	<p>・グループ活動に学生が参加し、市民・スタッフの方々とコミュニケーションを通して参加者の生活ニーズや活動の概要を把握する。 ・活動参加の効果についてインタビューを行う。</p>	<p>・重症心身障害児(者)を守る会の方と一緒に、療育キャンプの企画・準備をする。 ・国立病院機構〇〇医療センターの見学 ・療育キャンプへの参加：1泊2日のキャンプに参加し、直接子ども、家族とふれあい理解を深める。2日をとおして受け持ちの子どもを持ち、本人家族の支援をする。 ・療育キャンプ終了後、会の方を招いてmeetingをする。 ・学びを冊子にまとめる。</p>
<p>・インタビューにより「伝達方法・災害に対する備えの重要性」「当事者の心理」「災害後の状況」「災害を忘れないこと・継続性の重要性」「災害時の組織体制」などの理解が深まった。 ・災害を語る会に参加して「行政との連携」「河川の改修状況」などについて理解した。</p>	<p>・「『健康でありたい』という高齢者のニーズはとても強い。身体的なニーズよりも精神的なニーズが多い。」 ・「高齢者の健康を維持するには人とのつながりが重要であり、自主グループの大きな意義の1つもそこにある。」 ・「情報提供や意欲を高める働きかけが看護職の役割」</p>	<p>・子どもの理解：言葉では表現できないが、全身を使い自分を表現している、生きる力がある、コミュニケーションの難しさ ・家族の理解：家族の中でも母親に多くの負担がかかっている、兄弟の優しさ、母親の明るさ、母親の苦勞 ・社会資源の理解：情報の不足、自助グループの役割や意義 ・看護の役割：障がいをもつ子どもと家族に十分な情報を提供する必要がある</p>
<p>・災害当事者の理解は深まった。 ・日頃の備えや組織体制などの理解は深まった。</p>	<p>・元気な高齢者の健康に対する考え方やニーズがよく理解できた。「健康のために何かしたい」「もっと元気になりたい」「人と繋がりたい」というニーズを掴む事が出来た。 ・学生は市民が自主的に行っている活動に参加し、生き生きと活動する高齢者の姿から自主グループ活動の意義を見出すことができた。 ・支援者(看護職も含む)の役割についても考えることができた。 ・2種類の活動に参加したが、グループ相互のネットワークに関しては理解が困難であった。</p>	<p>・療育キャンプの準備の段階から、守る会の方と話し合いをもちながら進めたことにより、当日までにkキャンプに参加される方々の様子を知ることが当日のとけ込みがスムーズにできた。 ・受け持ちの家族とのふれあひも、前年と比較してもスムーズであった。 ・1泊2日の療育キャンプへの参加で、対象者の日常に近い生活を支援でき、生活者としての理解が深まった。</p>
<p>・地域住民としての当事者理解は深まったが、看護者としての防災・減災に対する考えは深まらなかった。 ・組織体制・日頃の備えについての理解が、「自分たちのまちは自分たちで守る」というまちづくりや自主防災組織体制づくりの必要性が重要であるというところまでの発展的思考には及ばなかった。</p>	<p>・自主グループの活動時間と授業時間が合わず、時間の確保が困難である。</p>	<p>・小児看護特論の中の時間で、準備から関わろうとすると、時間の調整が難しかった。 ・まとめて冊子を作成したが、学生にとっての負担は大きかったと思われる。</p>

柱であり、学生、市民、大学、行政の4者間の人と人との“つながり”を促進・サポートする拠点である。具体的には「教育力向上」と「地域活性化」を目標に、自主グループの活動支援、学生の自主グループでの学習支援、自主グループや行政との連携、ITを含むネットワーク化を促進することで、大学の地域に開かれた窓口としての役割を果たすことを目的としている（図2）。

このステーションが担う機能のうち、地域の自主グループとの連携を通じた「教育の推進」では、学生の学習目標に応じた地域活動、自主グループの情報提供を行う。そして、学生のグループ訪問や参加活動の調整を行っている。また、ITのネットワークを活用して25の自主グループと地域連携ステーションを繋ぐホームページの維持管理を行いながら、自主グループ活動の詳細、学生の自主グループへの参加学習に関する記事の掲載を行っている。

2. 看護学科での地域基盤型教育プログラム

1) 教育課程での位置づけ

この取り組みは3年課程の看護学科1～3年次の学生を対象とし、「教養・基礎教育領域」「看護専門教育領域」の2分野からなる科目：医学概論、小児看護学、成人看護学、老年看護学、看護特論や看護研究の科目で展開した。3年次の看護特論や看護研究の科目は、領域が選択制となっており、約30名(30～40%)の履修となる。

2) 地域基盤型教育プログラムの概要

(1) 自主グループと参加学習の内容

それぞれの科目と連携している自主グループへの活動参加を行いながら、小児看護学では「重症心身障がい児(者)を守る会」の教育キャンプの共同企画を、成人看護学では「がんサロン」に集う人々のニーズや医療格差の実態調査を行った。老年看護学では、「健康づくり・介護予防」のためのグループ参加者の生活ニーズや活動参加の効果についての調査を行った（写真）。

(2) 展開方法

地域基盤型教育プログラムの試行として、3年間の積み上げ方式による参加型教育と3年次半期完結方式がある。完結方式には参加型と滞

在型の2つの教育方法がある。3年間の積み上げ方式では「がんサロンへの参加」を軸に成人看護学で、3年次半期完結方式の教育では小児看護学、成人看護学、老年看護学の看護特論で取り組んだ。

工夫点は、小グループ活動での学生同士のグループダイナミックスを重視したこと、教育のねらいとして「学生のエンパワメントプロセス」を中心に位置づけ、学生のエンパワメント段階に合わせてきめ細かい支援、教材提供を行ったことである。また、自主グループへの調査結果をもとに看護研究の計画書作成に発展させたり、自主グループとの情報交換・交流を目的としたフォーラムで学習成果の発表の機会を設けた。平成21年度に行った参加型の学習プログラムの概要を示す（表2）。

IV. 研究方法

1. 対象

- 1) 看護学科学生：3年課程の3年次生76名のうち、研究への同意および有効回答の得られた42名を対象とした。その内、25名が地域基盤型教育プログラムの科目（小児看護学、成人看護学、老年看護学の看護特論）を選択していた。
- 2) 自主グループ：学生が学習参加した9つの自主グループメンバー89名のうち、研究への同意および有効回答が得られた43名を対象とした。

2. データ収集

1) 質問紙調査

- ・3年次生：地域基盤型教育による学習目標の到達度（5段階による自己評価）、地域連携ステーションの活用による学習への影響などの設問と自由記載による質問紙調査を科目修了後に行った。
- ・自主グループメンバー：地域基盤型教育による自主グループへの学生参加やグループへの影響に関する設問（5段階による評価）と自由記載による質問紙調査を科目修了後に郵送し、個別に返信してもらった。

2) 自主グループ活動参加による学生の学習レ

ポート：小児看護学，成人看護学，老年看護学で科目履修した学生25名の課題レポートを対象とした。

3. 分析方法

学生および自主グループへの質問紙調査より，生活者の理解，自主グループのニーズや活動の理解，コミュニケーション能力，問題解決能力など学習目標の到達状況，自主グループへの参加学習に対する意見やグループへの影響についてデータを収集した。学習目標の到達状況を5段階評価として点数化し，統計解析ソフトSPSS 11.0J for Windowsを用いて基本統計を算出し，単変量解析・二変量解析を行った。課題レポートの質的データについては内容分析を行った。

4. 倫理的配慮

本学の研究倫理審査委員会の承認を得て，教育の取り組み終了後，学生と自主グループに研究者が文書と口頭で，研究目的，方法，研究協力に伴う利益・不利益，研究協力への自由意思，匿名性の確保，関連学会等での公表，回答は自由意思により不利益がないことを明示し，説明した。学生は回収箱へ，自主グループメンバーは郵送によるアンケートの自主提出により，同意を得たものとみなした。

V. 結果および考察

1. 学生の学習成果：地域の自主グループからの学生の学び

1) アンケート調査から

3年次生へのアンケート調査では，42名の有効回答（55.2%）が得られた。「生活者としての理解」「エンパワメントの理解」「自主グループの現状やニーズの理解」「当事者の視点での援助の必要性」「看護の役割の理解」の項目は90%以上，「自主グループを取り巻くネットワークの必要性の理解」などほとんどの項目において，「できた」「ややできた」が70%以上を占めていた。このことより，地域基盤型教育プログラムの学習目標をほぼ満たしていると考えられた（図3）。

地域基盤型教育プログラムの科目を選択した学生25名と，選択しなかった学生17名では，「協調性・コミュニケーション能力の向上」に有意差を認めた（ $p < 0.05$ ）。自主グループ活動に参加した学生は，グループメンバーとの会話や協働作業をする機会も必然的に多くなり，そのことで協調性やコミュニケーション能力が育成されることに繋がったと考えられた。また，自主グループへのインタビューによる学習方法を用いたことで，伝える・聴くなどのコミュニケーションスキルをトレーニングする機会ともなっ

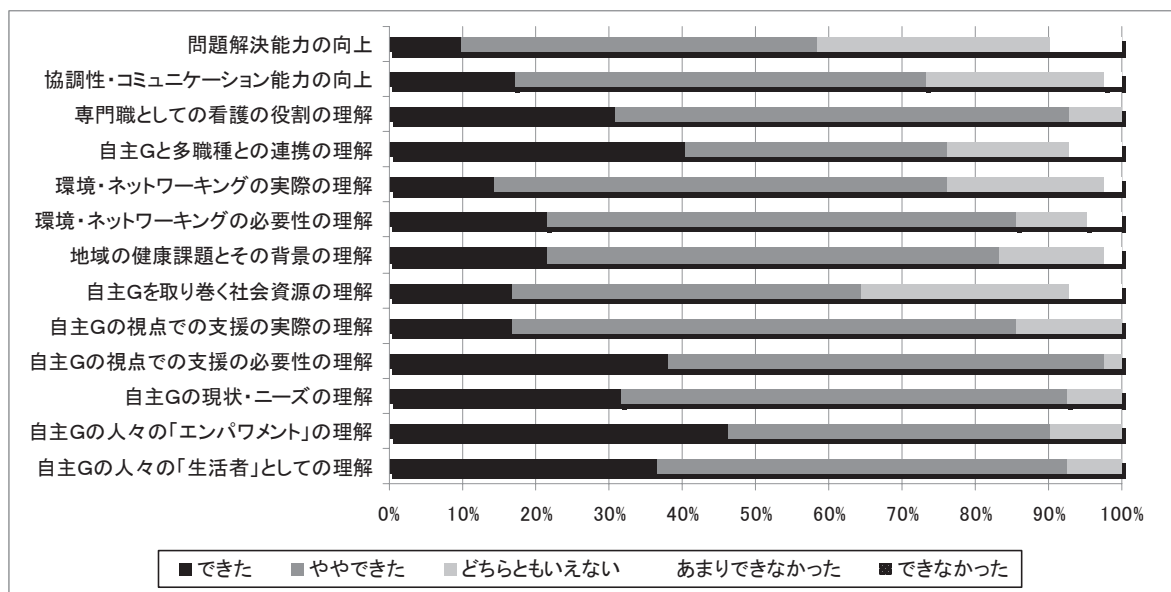


図3 地域基盤型教育の学習目標に対する学生の自己評価

たと考えられた。

2) 学生の学習レポートから

学生の学びとしては、地域に多くの自主グループが存在していることへの理解、自らが興味関心をもったグループに対する情報を地域連携ステーションを通して収集するなど「地域の自主グループに対する興味・関心の高まり」を認めた。そして、実際に地域で生活している当事者から話を聴き、活動等に参加観察することにより、当事者の考え方や価値観、抱えている課題やニーズについて「当事者の理解の深まり」があった。

当事者の特徴を考慮したコミュニケーション技術の獲得や地域で生活している当事者の考え・価値観を尊重した関わりの大切さについても理解していた。また、様々な課題を抱えて地域に暮らす人々を「主体的に生きる生活者」としてとらえ、「地域の人々の健康に関わる支援者とその役割」についても学習をしていた。

3) 学生のエンパワメント向上：気づきから自己変革へ

アンケート調査では、学生自らが関心を持った自主グループの情報は地域連携ステーションを介して収集し、グループ活動やボランティアなど「地域の活動に参加するようになった」という学習姿勢の変化を30%の学生に認めた。学習レポートからは、学習成果をフォーラムや大学祭などの機会を通して発表することで、学生自身のエンパワメントに繋がったと記載している学生もいた。

さらに地域基盤型教育の重要な成果は、学内に学生主体による自主グループが誕生したことである。自死遺族の当事者である学生が自主グループメンバーと協働して「自死遺族の会」を立ち上げ、翌年にはボランティア活動を行う「子育て支援のグループ」や「がん検診啓発のグループ」が次々と設立され、地域での活動を開始している。

これらは、自主グループに関わることで“自らの力で社会を変えていこうとする姿”を見たり、グループ活動を通して“力ある存在である”と感じるなど、自主グループの取り組みを目的

当たり前にして様々な気づきを経験し、学生たちの自己変革に繋がった成果であると考えられる。自主グループに着目した理由として、学生のみならず教員、そして当事者、コミュニティのエンパワメントの向上をもたらす、という項目があったが、まさに学生達に現れた成果である。

久木田(1998)はエンパワメントについて、「外部からの働きかけのみによって起きるのではなく、個人の意志や自己の潜在力への気づき、自信の形成などがあってはじめておきる極めて心理的な側面の強いプロセスである」と述べている。前述のように、様々な課題解決への取り組みが行われる自主グループとの出会いを契機に、学生たちは様々な気づきを得ていた。これは学生たちの限らない可能性・潜在能力を引き出すプログラムともなっており、そのような「仕掛けづくり」が今後も重要であると考えられる。

2. 自主グループが看護教教育に携わることの意義・成果

教育に協力いただいた9つの自主グループメンバーへのアンケート調査では、43名(48.3%)の有効回答が得られた。グループメンバーの37名(86.5%)が、参加学生の態度を「積極的」「十分に参加した」ととらえており、学生に対する好感度の高さが伺えた。また、回答者の30名(70%)以上が「励みになった」「学習支援ができるのが嬉しかった」と答え、学生参加がメンバーのエンパワメントや学習支援者としての役割意識の付与に繋がっていたといえる。

そして、回答者の半数以上が「学生を通して地域の方に自主グループを理解してもらえた」と答え、地域社会で学生を育てる意識の高まりと共に、地域の活性化にも繋がっていると考えられた(図4)。

3. 教員、行政関係機関への効果

教育する者への効果として、教員自身も地域で暮らす生活者の健康課題の理解がさらに深まり、現場に出向くこと、当事者の声を聴くことの必要性を再認識した。また、地域の自主グループや住民との信頼関係を構築する機会ともなった。

そして、教育目標をはじめ学習内容や方法な

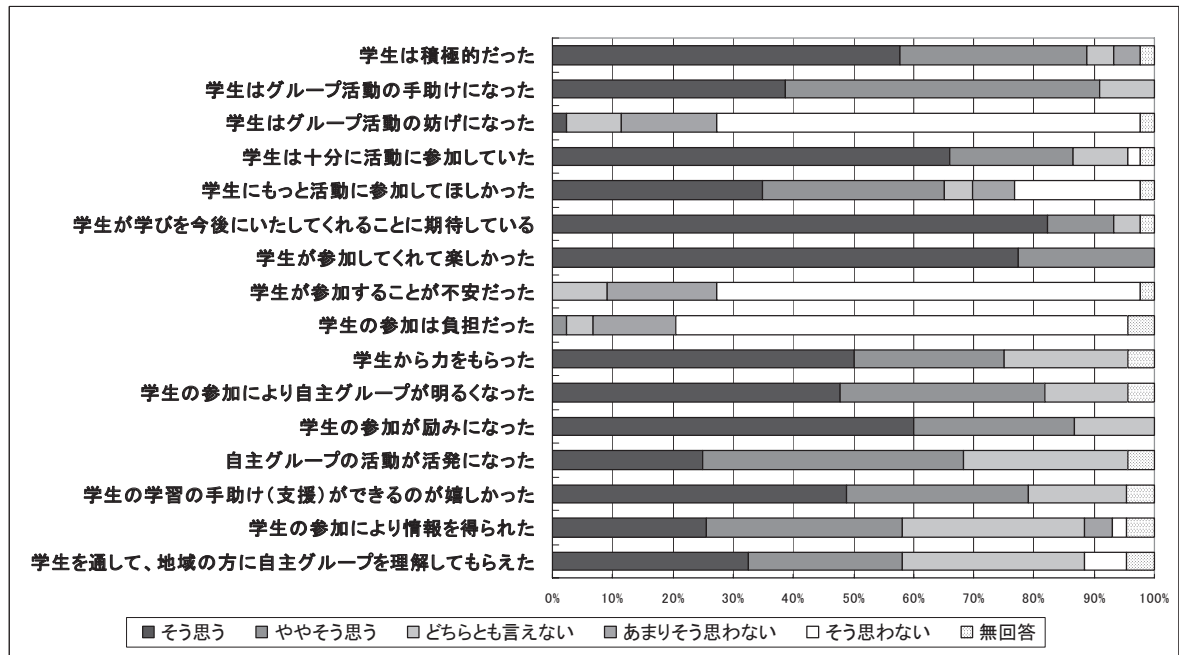


図4 地域基盤型教育に参加した学生に対する自主グループメンバーによる評価

どを協議することで、科目間の連携を深める場ともなった。セルフヘルプ・グループは、問題の数だけグループがあると言われるほど数多く存在し、活動分野も多様化している(谷本, 2004)。そのため、自主グループの多様さ、抱えている課題の大きさなどに対応した学生の関与のレベルを見極める、教員の教育力の向上が今後さらに重要になると考える。

行政関係機関においては、連携を図りながら地域の健康課題への取り組みや社会資源の発掘・開発、ひいては政策づくりへと発展していくことが期待される。

4. 今後への課題

今回の学習は医療モデルが中心となっている看護教育に「生活モデル」の考え方を取り入れた試みだった。前述したような成果が得られたが、一方で以下のような課題が残った。

- ・ 現行のカリキュラムでは、自主グループの活動時間と学生の学習時間が合いにくく、時間の調整が必要である。
- ・ 参加型学習と地域滞在型学習の履修方法の異なる学生間で、学びの共有化を図る機会を設けることができなかった。今後、共有化による理解や動機付けを図ることが必要である。
- ・ 自主グループの多様さ、抱えている課題の大

きさなど様々なグループを対象としていることから、各々のグループに対応した学生への関与のレベルを見極める教員の指導力の向上が必要となる。

- ・ 自主グループと学生・関係者を繋ぐ地域連携ステーションやIT機能の活用がさらに充実し、学生の学習支援としての体制が定着していくことが求められる。

これらを解決していくことで、様々な課題を抱えて地域に暮らす人々を主体的に生きる生活者として捉えることが可能となり、地域の健康課題の理解、社会の看護ニーズに対応する真の能力の育成に繋がると考える。

保健医療福祉を取り巻く状況は著しく変化し、必要とされる看護の能力もさらに増大している。

暮らしやすさやQOLの向上にはニーズの理解が重要であり、そのためには一人ひとりの価値観や生き方を尊重した「生活者」としての理解、コミュニケーション能力や問題解決能力がますます求められる(吉川:2010)。その能力の育成に、地域に学び、地域の教育力を引き出し、活用していく地域基盤型教育は一つの教育方法として効果的であると考えられる。

Ⅵ. 本研究の限界と課題

本研究では、施設を中心とした看護教育から、地域で健康課題に取り組む自主グループの活動と連携した地域基盤型教育を試み、看護学科3年次生の学習成果と課題を明らかにした。しかし、参加型の教育プログラムの科目を選択した学生は調査対象42名中25名で、また一施設での限られた科目での結果でもあり、一般化には至らない。また、教育プログラムとして、3年間の積み上げ方式による参加型教育と3年次半期完結方式を試行したが、それぞれの学習過程に応じた学習成果を明らかにしながら、丁寧な分析と評価をしていくことが課題である。

Ⅵ. 結 論

地域で健康課題に取り組む自主グループの活動と連携した地域基盤型教育による、3年次生の学習成果としては、「地域の自主グループに対する興味・関心の高まり」、当事者の考え方や価値観、抱えている課題やニーズなどの「当事者の理解の深まり」とともに、「コミュニケーション能力の向上」を認めた。自主グループ活動への自主的参加や学生主体による自主グループが誕生するなど、学生の自己変革やエンパワメントの向上を認めることができた。さらに、学生が自主グループ活動に参加することにより、グループやメンバーのエンパワメントを促していた。これらのことから、「生活者」としての理解、コミュニケーション能力や問題解決能力の育成に地域基盤型教育は効果的であると考えられた。

課題としては、自主グループ活動参加のための時間の確保と調整、学習内容の共有化を図ることなどが明らかとなった。

謝 辞

本研究にご理解をいただき、協力いただきました地域の自主グループおよび学生の皆様に心から感謝申し上げます。

なお、本研究の取り組みは、鳥根県立大学短

期大学部出雲キャンパスの平成19年度～21年度に採択された現代的教育ニーズ取組支援プログラム『地域を基盤とする看護教育への変革』における評価活動の一環として行ったものである。

文 献

- 伊藤智子 (2010) : 地域を基盤とした老年看護基礎教育における学生の学び－中山間地域での高齢者の暮らしから－, 鳥根県立大学短期大学部研究紀要, 4, 101-110.
- 金井一薫 (2001) : “生活を支える看護”の本質, Nurse date, 22 (9), 10-13.
- 久木田純 (1998) : エンパワメントとは何か, 現代のエスプリ, 22, 376, 至文堂.
- 國井治子 (2003) : 「新たな看護のあり方に関する検討会」解説, 看護, 55 (8), 22-23.
- 下村裕子, 河口てる子, 林優子, 土方ふじ子, 大池美也子 (2003) : 看護が捉える「生活者」の視点－対象者理解と行動変容の「かぎ」, 看護研究, 36 (3), 25-37.
- 谷本千恵 (2004) : セルフヘルプ・グループ (SHG) の概念と援助効果に関する文献検討－看護職はSHGとどう関わるか－, 石川看護雑誌, 1, 57-64.
- 吉川洋子, 松本亥智江, 吾郷ゆかり, 田原和美, 松岡文子, 祝原あゆみ, 梶谷みゆき, 平井由佳 (2009) : 生活者の理解に向けた基礎看護実習の教育方法と評価, 鳥根県立大学短期大学部研究紀要, 3, 51-59.
- 吉川洋子, 松本亥智江, 松岡文子, 田原和美, 平井由佳 (2010) : 地域住民としての交流をとおして身につけるコミュニケーション能力, 看護展望, 35 (4), 16-23.
- 文部科学省 (2007) 現代的教育ニーズ取組支援プログラム http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/07/07072005.htm

Result and Problem of Community Based Nursing Education in Collaboration with Self-Help Group Activity

Fumiko HIRANO, Tomoko ITO, Emiko TAKAHASHI, Fumie BESSHO,
Maki KATO, Kazuya YAMASHITA and Keiko AGAWA

Key Words and Phrases : Community based education, Self-help groups,
The person who lives, Communication skills, Empowerment